

美術の窓(6)

モネ展を見て

大和文華館館長 吉川 逸 治

昨年の十二月から今年の一月まで京都の国立近代美術館で、印象派の巨匠モネの展覧会が開かれ、多勢の観覧者で連日賑った様子ですが、私も人波に揉まれながらも、ゆっくり鑑賞できました。印象派は、近代絵画の幕明けとして、その作品は私共に身近かに感じられますが、浮世絵などとの関係も浅からず、日本人には最も親味を感じる西洋画です。ことにモネは、かつて松方幸次郎氏が親しく彼のジヴェルニーの屋敷を度々訪ねて、作品を数多く購入し、特に晩年の超大作の睡蓮の図（これは戦時中、腐蝕してしまったのですが）まで譲ってもらったので、日本には国立西洋美術館はじめ、その他多くの美術館に優れた作品があって、よく知られた画家です。しかし、今度の展覧では、ごく初期の、まだコロオヤやブーダンなど彼の先生格の風景画家の作風の影響の強い、黒や褐色の勝った重い色調の風景画から、段々と色調が明るくなる印象派初期の風景画まで、順序よく陳列され、彼の画風の進み具合がわかって興味を惹きました。ことに普佛戦争の混乱を避けて、オランダ、イギリスに渡った間に、広重や北斎たちの風景版画を見て、黒や暗色の陰影を色彩で代換するヒントを得たとされますが、なるほどその戦後のパリ近郊風景画で次第に色数が多く、色調の調整が本格的になって参ります。1874年の第一回印象派展、次の第二回印象派展と70年代に、モネたちの印

象派の初期の画風が確立される事情がわかります。第一回の彼らの展覧会で印象派の名前を付けられる原因となったモネの「日の出、印象」と題する霧のかかった港の漠とした光景も見られました。しかし、それより「日本娘」と題する縦長の大作で、緋色の花魁衣裳を着た女性の姿に驚きます。若いモネが人物画の大作で示す「装飾画家」の腕の冴を示す好例です。モネは風景画で出発しますが、パリの美術学校に入って、一時はアングルの弟子たちのアカデミックな教育も受け、クールベにも接近して、達者に人物画の大制作を描きこなす腕も鍛練したのです。しかし、サロン出品を目ざした最初の超大作「草上の食事」から、彼はただ若い男女の森の中の行楽姿をかくだけが目標ではなく、森の木々を透過する日光の下に木々の緑、草原、地面とそこにひろげられた白布とともに彼らの姿を描き、光線によって全体の統一される具合を描出せんとしたので、この点が先輩マネの「草上の食事」と異なり、かつクールベにも気に入られなかったらしく、サロン出品を断念し、今日ではいくつかの部分に分断されて残るに過ぎないのです。この「日本娘」はただアカデミックな達者な風俗画に見えますが、実は、洗った室内光線のなかに衣裳の緋色の変化を厳しく提示し、沢山の団扇で飾られた洗った色調の背後の壁との間に空気層を感じさせます。異国の衣裳を着た愛人の



ジヴェルニーの「睡蓮の池」 筆者撮影

顔も特に強調することなく、顔も腕も着物の布も縫取り模様も等しく光のうちに整頓されて彩られるのです。

かつて、あるフランス画家から聞いた話ですが、彼の父親が語ったところによると、モネはいつも真っ白いハンケチをもって写生にゆき、この白ハンケチをパレットの端に置いて、外光下の最も明るい調子をこのハンケチの白として、これをもとに他のさまざまなものの色に相応する絵具の色をパレットの上で調整しながら描いていったとのこと。この感覚的で同時に知的な操作のために、彼の画中の対象はみな、人物でさへも、全体の光線の統一された秩序の中に服従させられる結果、個々独立した存在が体系的に服従させられるので、光線を描くとは光を知覚する彼の一心不乱の精神的努力を描くことに外ならないのです。しかも、あくまで自然に則して。主客未分離の純粹な境地を描く訳で、その正確で達者な腕前も、画家として古今に絶するものだったのです。レオナルド以来の大画家だと、かつて児島喜久雄先生は、パリのモネ美術館の睡蓮の池の大壁画を前に、絶讃されました。

晩年のモネは睡蓮の池を描いて実にすばらしい作品を沢山描き、彼の美術の最も豊かな境地に達します。勢鋭く記す一抹の色が、あるいは水に浮ぶ花卉、あるいは水の輝き、あるいは水に映ずる白雲など、正確な明度で画面にそれぞれ



ラ・ジャポネーズ(日本娘) 1876年



しだれ柳 1920~23年

の空間的位置を決めてゆきます。さらに、最晩年になると、視力衰弱し、乱れたタッチで何を描いたか解らないと、一括してこれまで公開されなかったのですが、すさまじい画が沢山近年パリのマルモッタン美術館で陳列され、初めて、巨匠の最後の大胆な筆致で殆んど抽象画の如き情熱的な光の絵画が知られることになったのです。それらも京都展で多数展示され、私どもを魅了しました。

季刊 美のたより No.62

昭和58年 3月5日

発行 大和文華館